

## '98中国女文字研究報告

遠藤 織枝

### 1 はじめに

1998年の女文字調査は、3月と8月に、現地ではなく北京で行った。この調査のうち、3月の三朝書の鑑定についてと、8月の何艶新の文字の調査については、文教大学文学部紀要12-2号に報告している。本誌では8月に突然出現した、新たな書き手何静華について、主に報告する。

'98年8月の調査の目的は

- 1 現地で女文字で歌われる方言の音韻を調べる
- 2 何艶新の文字を、文字の種類とそれぞれの文字の音韻を確認したい
- 3 女性たちが以前結婚式などで歌った歌を採集したい

の3つであった。

そのため、江永県から、何艶新、歌をよく知っている何静華、現地の方言がわかり、それを漢字に写せる人として、蒲念先の3人に北京に来てもらった。

1については、97年9月に、現地調査を行った際に録音した資料を整理し、確認の作業が残っていた。

2については、何艶新がいままで書いた多くの作品の中から、異なる字形の文字をすべて拾い出し、それぞれの文字を発音してもらうこと、それと、作品には書いていなくても何の書ける文字があることも考えられるので、それらを調べることである。そのために、現地の方言の音韻を調べる必要があったが、97年調査でそれがほぼまとまった。それに基づいて、すでに、何の書いたことのある文字の示す音韻以外の音韻について、それらの音韻を示す文字を知っているか否かを確認していった。

3については、歌が好きで、むかしからの歌がたくさん歌える人に歌って

もらって、録音し、それを文字化しようと考えた。そのため、97年9月の現地調査でも、たくさんの歌を歌ってくれた何静華に北京に来てもらった。

今回、現地へ行かずに、現地から来てもらったのは、費用と時間の節約になると考えたからである。外国人であるわたしが現地で調査をするとなると、現地政府にすべて委ねることになる。そのための手続きの時間や費用を考えたら、該当する人だけを北京に呼ぶほうが何かと能率的だろうとの、中国人共同研究者のアドバイスによる。

## 2 何の文字

何艶新は、94年8月に初めて出会ったときは、極めて稚拙な文字しか書けなかった。しかし、この時の調査がきっかけとなって、40数年のブランクを埋めるべく懸命に思い出し、練習してめざましく回復した。今では、なんでも自分の思いが書き表せるまでになっている。

この間、古くから伝わる子供の歌から始まって、「梁山伯と祝英台」（この説話は一般には「梁祝」と縮めて言われるが、この地の女性たちは「祝英台」と女性主人公の名で呼ぶことが多いので、以下「祝英台」と略記する）、「三姑記」「孟姜女」などの民間伝承説話、自分の半生を記した自伝など、約16000字の女文字（中国では「女書」）を書いている。

これらすべての文字を対象にして、何の使える文字の実態を知りたいと考えている。

文字の数を数えるとき、いちばん問題になるのが異体字の扱いである。字形の酷似した複数の文字が、ある文字のヴァリエーションなのか、別の意味や音をもつ、別の文字なのか、の問題である。前者は異体字で後者は別字ということになるが、その区別を、書いている本人に確かめる必要がある。

たとえば、「𠂔」「𠂕」「𠂖」などいずれも漢字訳にあてると「山」となる文字がある。「𠂗」「𠂘」のようなものがある。それらが別のものか同じものかを確認しなければならない。3.5で、4人の書き手の文字を比べているが、そこでは点の有無や、線の長さがあまり厳密に区別されてい

ない実例を示している。

後世の我々が、漢字の点画の厳密さにならされてしまった目から見るほどには、この文字を作ったり使ったりした女性たちは、細部に厳しくなかったようだ。学校も教科書もないところで、また、公的な文書のために使われることのなかった文字として、あいまいになり、異体字が多く生まれるのは当然であった。それを、細部にこだわって、字形が違うから別の文字だなどと考える方が、実情と離れた判断だと思われる。

いままで、宮哲兵<sup>(註1)</sup>、趙麗明<sup>(註2)</sup>、Chiang<sup>(註3)</sup>、周碩沂他<sup>(註4)</sup>ら中国、アメリカの研究者が、文字表を提示しているが、そこではすべて異体字を別の文字として、記載している。そのため、最も多くの文字を示す周碩沂らのリストは1570字に及んでいる。

一方で、趙らは「1人の女性が書ける文字は、6～700字で、それだけ書ければ、この地の方言をすべて表記できる」<sup>(註2)</sup>と報告している。いろいろな人が書いたものを合わせて、字形の違うものを別の文字とした表には当然多くの異体字が含まれる。杉本つとむの「同じ観念を示すものは同一文字で、その文字の変体（バリエント）は異体字である」<sup>(註5)</sup>との立場に立てば、1500文字にもよることは考えられない。字形の異なるすべての文字を集めたという満足感を得られるかもしれないが、その結果は女文字の特質や実態から遠ざかってしまうのである。

わたしの研究目標のひとつは、何艶新の書ける文字の実態を究めることである。趙・周ら従来の研究成果の上に、その後の伝承者である何の文字の一覧表を作りたいと考えていたが、異体字の考え方が根本的に違うことがわかり、あまり参考にできなくなった。自分なりのこの文字の実状に近い整理の仕方を見いだしたいと考えている。

### 3 何静華の文字

#### 3.1 思いがけない書き手の出現

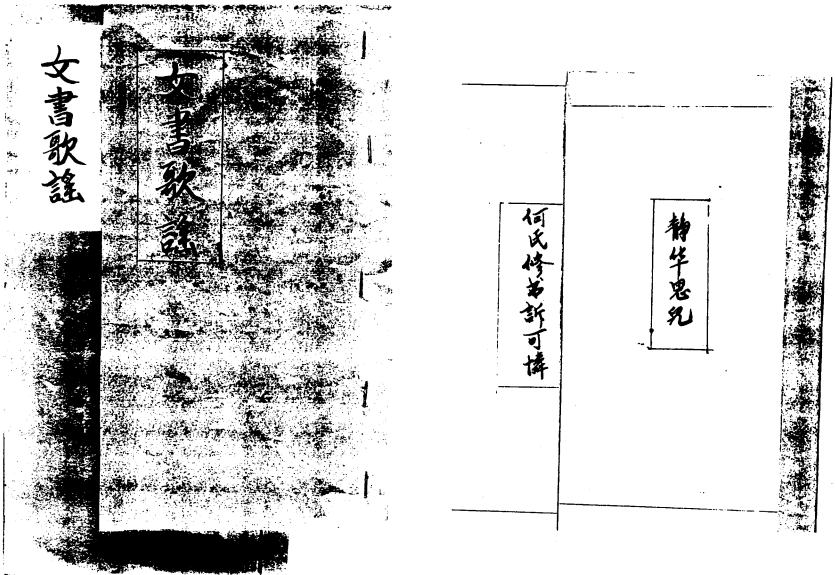
今回、湖南省江永県から北京に来てくれた3人のうち、蒲念先は、71歳、

そのときどきの感慨を、漢詩に詠み込んで楽しむ文化人である。江永県から桂林に出て、桂林から北京に来るまでの26時間の長い汽車の旅の中でも、詩を作ってきた。その詩を方言の音で詠んだら、それを聞いて何静華が女文字を漢字の下に書いたという。北京の宿舎で、3人の到着を待っていたわたしに、蒲は着くなり、その何静華の文字を見せて聞いてきた。この女文字は正しく書けているかと。

まさか、また新しく、女文字の書ける人が現れるとは思ってもなかったの  
で、わたしはうろたえた。蒲の差し出した紙切れには確かに漢詩とそれに合  
わせた女文字があった。細い形のよい文字である。そして、漢詩の内容と一  
致する女文字である。

旅装を解いて、長旅の疲れがとれたころを待って、何静華へのインタビュ  
ーを始めた。

何静華はピンクの表紙をつけてホッチキスでとめて作った、薄い冊子を2  
冊もってきていた。(資料1)



〔資料1 何静華の作品の表紙と2冊の表題〕

一冊は「何氏修書訴可憐（何氏文をしたため苦しみを訴える）」と題され、自分の生涯を書いたもの、もう一冊は「静華思児（静華亡き児を思う）」と題したもので、早逝した息子を悼んで書いたものという。その冊子には「何氏……」の方は、前半に、一句7文字の句が、134句、文字数にして938の女文字が書かれ、後半にはそれに対応する漢字が書かれていた。

「静華思児」の方は、前半に94句658字の女文字が書かれ、後半に「何氏……」と同様、翻字した漢字が書かれていた。

北京への途上の、聞いた歌を女文字で書き写した紙きれも、驚きであったが、それよりも、何静華が自分で歌を作って書いてきたというのは、まったく予期せぬうれしい贈り物であった。

### 3.2 女文字を書き始めたきっかけ

昨年（'97年）9月、わたしたちは20日間にわたって現地の音韻の調査を行った。そのとき、現地に伝わる古い歌をたくさん知っている人として、何静華はわたしたちの調査に協力してくれた。「孟姜女」「祝英台」など、長い物語の歌を歌ってくれた。それらを、何艶新に女文字で書いてもらった。そのとき、何静華に女文字が書けるかとも尋ねたが、「できない」と即座に彼女は答えた。疑う余地もないほどの即答であったため、静華の文字能力については全く期待していなかった。以下は何静華にきいた彼女と女文字とのかかりである。

静華は、娘のころ女文字を見て我流で覚えようとしたことがあった。彼女は、1940年允山鎮の生まれ。允山には、女文字は伝わっていない。静華の叔母（母の妹で、消蒲鎮層山の生まれ）が葛覃（上江墟鎮の村、女文字が盛んだった村の一つ）に嫁いでいて、静華はよくそこへ泊まりに行っていた。叔母に女文字を織り込んだ花帯を習ったことがある。その図案を初め花だと思って何の花かと叔母にきいたら、花ではない、文字だと言われた。叔母は長脚蚊文字とか、姑娘文字とか言っていた。しかし、叔母が女文字を書いている

るところは見たことがない。

そのころ、叔母から、むかし、女性たちが歌っていた歌の5、6曲を女文字で書いた本をもらった。歌はむかしから伝わる正月十五日の歌とか、山の景色の歌とかだった。叔母が最初歌うのに真似て歌ううち、その女文字も読めるようになった。書く方は、その歌の本の上に薄い紙を置いて、上からなぞって覚えた。何回も何回も書いた。何十枚もの紙に書いた。

14歳のころ、小学校に入った<sup>(は6)</sup>。漢字を習ったが、蚊文字の方がきれいだと思った。歌が好きだから、歌ったり書いたりしていた。趣味として女文字をなぞって書いていた。2階で宿題をやりながら、よく書いていた。母がその文字を見て「藤のつるのようだ」と言った。

花帯を織るときも、女文字を使った。織り込む文字は決まったもので、自分で考えて織ったことはない。

また、自分で歌を作って書いたこともない。

昨年9月、日本から調査に来た研究者たちの机の上にあった女文字のコピーを見たり、何艶新が書く文字を見たりしたとき、いくつか読める字があると思った。以前にも学者が自分の県に女文字の調査にきていることは知っていた。でも、そのときは、書いてみようとは思わなかった。今年の調査のとき、研究者の1人が女文字はとてもいいものだ、女性たちが、自分の気持ちを書いてきたいい文字だといっていた。そして、コピーの不要になったものもくれた。研究者たちが帰った後自分も書いてみようと思った。

たくさん悲しいことがあった。それを文字にして、残しておいて、娘に読んでもらいたいと思った。歌をたくさん知っているので、歌の中に出てくることばと似ているものを取り入れて作った。思い出したり、コピーの中の字を使ったりして書いたが、それでもわからない文字は周碩沂に尋ねた。周は初めてわたしの書いたものを見たときとても驚いた。何艶新よりうまいといった。だいたい正しいと言った。知らない文字は周に教わることにした。

漢字で、自分の思いを書こうと思ったことはない。漢字は3年半しか習っていないから、書きたくても書けない。家で簡単な漢字の物語などを読むこ

とはあるが、書くことはほとんどない。手紙も書いたことがない。

女文字の方が覚えやすい。簡単だし、趣味だから。もともと歌が好きだから。

### 3.3 静華の書いたもの

「静華思児」と「何氏……」を作った時期について静華に聞いたところ、次のように答えてくれた。

「静華思児」の方を先に書いた。今年の2月から4月にかけて書いた。文字を思い出しながら書いたので時間がかかった。七文字で一句の歌を作り、それを文字にする、という作業を繰り返した。2か月かかった。

「何氏……」の方は、慣れてきたので、5月1か月で、作り上げた。

以下に「静華思児」の一部を示す。(日本語への翻訳は陳力衛目白学園短期大学専任講師と遠藤で行った)

正月新年幸せに過ごし	一家円満憂いなし
新年の日々送るとき	貧しいながらも水甘し
二月になると雨降り続き	春待つ木々の芽生え促す
蘭花一本鉢にいければ	芳香は五湖万里に漂う
三月息子が世を去って	血涙流れて空も見えず
息子二十八になったばかり	だれか知るかく早くして世を去ると
四月になっても泣き続け	夜通し泣いては枕をぬらす
昼夜泣いて肝、腸を断ち	いつの日孫を育てあげん(中略)
七月半ばを待ちかねて	愁い晴らして吾子を迎える
息子はあの世母はこの世	陰陽隔てて話しもできず
八月青天白雲浮かび	母の嘆きは晴れやらず(後略)

このように、息子を亡くした悲しみが12月までのそれぞれの季節に合わせて歌われている。この94句に及ぶ長い歌を、静華は全部自力で作りに上げたのか。静華の話では、ほとんど自分で作り、わからないことばだけ、周碩沂に教わったというが、周の力がどのくらい加わっているのだろうか。

周碩沂は現地で最初にこの女文字の価値を認め、40年以上研究をつづけていて、現在女文字を最もよく知る男性である。かつて、50年代には当時よく女文字が書けた胡慈珠と一緒に「女書の歌」という作品を作ったこともある。

その周に静華が教わったというが、単に忘れた文字だけ聞いたのか、歌の作り方まで教わったのか、それはわからない。本人のことばだけでは、客観的な事実を知ることは難しい。10月初旬、周に問い合わせの手紙を出したが、12月5日現在、まだ返事の手紙は届いていない。

この、母親の子を思う心を1年の12か月にわたって歌っていく表現手法は、静華が独自に編み出したものではない。

何艶新は97年末夫を亡くした。それ以前は書いたことがなかった「寡婦の歌」を思い出して書いてみたといって、「寡婦の歌」を織り込んだ花帯を見せてくれた。その歌は次のようなものであった。

正月新年幸せに過ごし	一家悠々憂いなし
家出るときは傘をさしかけ	家にはいればお茶汲む僕あり
二月夫に悪運起こり	哀れで見る目も痛ましい
だれか知る病膏肓に入るを	心はただただ乱れるばかり
三月夫が世を去って	春耕百忙頼る人なし
夕暮れ納棺別れを惜しみ	鴛鴦の妹背も連れ添えず（以下略）

何艶新は、自分で自分の思いをことばに表して女文字で書き、歌える人である。しかし、この歌は古くから、伝わったもので、彼女が少女のころ、おばあさんたちがよく歌っていたので、聞いて覚えていたのだという。知ってはいたが、自分が寡婦になるまでは、歌ったことはなかったという。

この歌と静華の「静華思児」とは、発想が同じである。つまり、静華は、「寡婦の歌」を下敷きにして、自分の思いを込めた「静華思児」を作ったのである。歌が大好きで古い歌をたくさん知っているからそれができた。古い歌を基本として中心に据え、昔の女性達が表現した類型を借りながら、自分のことばを適宜あてはめていって、「静華思児」の歌に作り上げたということであろう。



### 3.4 何静華の文字のもつ意味

何静華の女文字の獲得は、まったく、予期していないことであった。目の前で美しい文字をすらすらと書いてみせてくれても、信じられない気持ちだった。この文字をどう位置づければいいのか、まだ、十分には整理しきれていない。

静華の話だけではわからない部分があるからである。彼女自身で、思い出して書けるようになった部分と、周碩沂に教わった部分とがあるようだが、その中身はわからない。ただし、文字の獲得の結果だけを問題にするなら、彼女の記憶と週の指導とが重なったものであっても、かまわない。

彼女が作ったという、歌が問題である。静華が、自身の思いを、すべて自分のことばで歌に仕立て上げ、それを、改めて獲得した文字を用いて書き表したのだろうか。何艶新や、陽煥宜のように、自分の思いを女文字で表現したのであろうか。

それとも、周に自分の思いを伝えて、彼に歌に作り上げてもらったのだろうか。女文字の上手な人に、自分の言いたいことを話して、その人に歌に作り上げて女文字で書いてもらう、というやり方は、今までの聞き取り調査で多くの女性から聞いてきた。静華の場合も、それは当然ありうる。何艶新の話でも、彼女の祖母が、人に頼まれて、歌を作って書いてあげていたというし、陽煥宜も他人に頼まれて、その人から事情を聞いて歌を作ったことがあると言っていた。93年の調査のとき、朱雲娣は、自分の母親の生涯を義年華に話して、義に伝記を作ってもらったと言っていた。

もし、何静華が、自分で歌を作って書いたとすれば、従来の伝承者の女文字の能力に近い力があると言えるが、周に作ってもらったとすれば、その作歌能力、つまり、女文字を自由に操る力はないことになる。この点は目下のところは、どちらとも言えない。

### 3.5 静華の表記能力

たとえ、周に歌は作ってもらったにせよ、何静華がわたしの目の前で、女









文字を書いて見せたのは事実である。何が、女文字が書けることは確かである。この何静華の文字力はどの程度だろうか。



静華が、今回北京で書いた「祝英台」の最初の8句を、同じ説話を書いたほかの書き手の文字と比べて、その力を見ることにする。他の書き手とは、1980年代の後半たくさんの資料を残して、女文字研究に貢献した高銀仙、1990年代の初め、高の没後、何艶新が見つかるまでの唯一の書き手であった陽煥宜、1994年その存在が明らかになった何艶新、の3人である。

右から、高、陽、何艶新、何静華と4人の文字を並べて比べてみる。(資料2)

静華の文字で、高と異なる文字は[a]から[k]まで11種16文字、何艶新と異なるのは、[ア]から[コ]まで10種16文字である。陽の文字は、歌そのものの記憶が他の3人と違う部分が多いので、全体の比較はしない。

静華が、高、艶新と違う文字をいくつか書いているが、これらの異なりは必ずしも文字の間違いではない。

[a]、[c]は誤字ではなく、異体字である。それは、[a]は、何艶新のと比べればわかるし、[c]は、陽のと同じであることから、同一文字の異体であることがわかる。[k]は類似の文字の混用である。「杭」にあたる[hɑŋ<sup>4</sup>]を表す文字は「」で、「」は[sie<sup>1</sup>]の音を表す文字である。本来「」でなければならないところを高もこの二文字を混同して「」を用いている。何艶新に両字の使い分けを確認すると、「」は[hɑŋ<sup>4</sup>]の音で現地語の「行、皇、黄、杭、寒、含」に相当し、「」は[sie<sup>1</sup>]で「昔、惜、錫」に相当するそれぞれ別の文字だという。しかし、何艶新が書いた「祝英台」の中では「杭」[hɑŋ<sup>4</sup>]を「」で表している。静華だけが「」を用いて、正しい文字づかいをしていることになる。ここでは異体字ではなく類似文字の混用ということになる。

[d]は、「一」を表す文字が「ノ」と「」と二種類あり、それぞれ別の文字で書いたということである。日本の漢字で「一」と「壹」があるのと全く同じ事情で、高と陽は「壹」に相当する方の「」を選び、2人の何は、「一」に当たる方の「ノ」を選んだのである。



□e、□h、□i、□jは、同音の文字の使い分けである。何静華の□eは、高とは違うが、陽、艶新とは同じである。

□hは、女主人公祝英台の名前で、高と艶新が同じ、静華の文字と陽の文字とは同じではないが、同じ系列の文字遣いをしていることになる。周碩沂らの文字リストの中の「英」に相当する文字は「𠄎」で、陽のほうが誤字を用いていることがわかる。「英」の音を表す文字の伝承に「𠄎」と「𠄎」の二つのルートがあるということである。静華は、周に習ったといっているので、「𠄎」の文字を教わったものと思われる。

□iは、高、陽とは異なるが、艶新と同じ文字遣いをしている。

□jは静華だけが用いている文字だが、「到」に応じる現地方言の音[liɑ<sup>4</sup>]を表す文字で、静華の誤用ではない。

□fは4人とも異なる文字遣いである。高銀仙は「𠄎」、陽煥宜は「𠄎」、何艶新は「𠄎」、何静華は「𠄎」と書いている。それぞれ「𠄎」を伴って[fɑŋ<sup>4</sup> kaŋ<sup>4</sup>]の音を表わし、この地方のことばで「風光」の意味である。高の「𠄎」と艶新の「𠄎」とは同音で、字形の類似する異体字である。陽の用いた「𠄎」は[fɑŋ<sup>4</sup>]の音で高、何艶新の、「𠄎」「𠄎」と声調は異なるが、音韻は同じである。しかも「𠄎」の音は現地のことばの「方、封、峰、豊、風」に相当する。何静華の「𠄎」は現地音の[pɪ<sup>4</sup>]で「風、分、份」に相当する。この4文字の関係は以下ようになる。

「𠄎」・「𠄎」 = [fɑŋ<sup>4</sup>] ⇒ [fɑŋ<sup>4</sup>] = 「𠄎」 = 「方、封、峰、豊、風」  
の風⇒風 = 「𠄎」 [pɪ<sup>4</sup>]

ここから、この4文字が関連し合っていて、静華が「𠄎」の字を用いた理由もわかり、誤字ではないことが納得されるのである。

□b、□gは、誤字である。□bは「𠄎」と、□gは「𠄎」と、それぞれ混同したものであろう。

以上、何静華の文字を高らと比べてみた。その結果、高と別の文字16字の中ではっきり間違いといえるのは2文字にすぎなかった。56文字中の2字、3.6%の誤字率である。静華の表記能力はかなり高いとみてよいだろう。

その一方で、静華の文字の以下のような性質から、陽煥宜、何艶新と同列

に置くことのできない事情もある。

静華の文字には、従来の伝承者と異なる点がいくつかある。

- 1 静華は、女文字のない土地の生まれで、少女のころ、だれからも習ったことがない。
- 2 静華は、歌が好きで、歌と一緒に、娘のころ自分で文字を覚えようとしたことがある。
- 3 自分の思いを女文字で書くことはしなかった。
- 4 1997年、57歳のとき、調査の協力をして、女文字を見たのがきっかけで練習し、書き始めた。
- 5 約1年間で、歌える歌のことは書けるようになった。
- 6 わからない文字は周碩沂に習っている。

静華の文字をどう位置づければいいのか、現在結論は得ていないが、新しい書き手が出現したことは喜ぶべきであろう。文字力が多少低くても、何艶新の女文字復活の経過を思い合わせれば、静華も、練習により、力をつけることはできる。歌が好きで古い歌をたくさん知っているから、その歌のことはをつづりあわせれば、自分の歌が作れるようになるかもしれない。静華の文字力、女文字での表現力など、向上する可能性は高い。もちろん、周囲の環境から自然に近い形で伝わった従来の伝承とは、習得のプロセスがまったく異なるので、質的な変化が起こる可能性もあるが、いずれにせよ、静華の文字は、消滅寸前の女文字の生命を少し延ばすことに寄与してくれるだろう。

この夏、3人を北京に招くことを決めてすぐ、3人の1人蒲念先に陽煥宜の様子を見てきてほしいと頼んだ。その健康状態が心配だったからである。蒲の報告は、89歳の高齢を迎えた陽が、今は手が震え、頭もぼけてきて、ほとんど書けなくなっているというものであった。いつかはその時が来ると恐れていたことが、ついに現実となったのを知らされたのだった。

それと前後しての、静華の出現である。留保条件がいくつかあるが朗報にはちがいない。

注

- 注1 宮哲兵編「女書—世界唯一的女性文字」(台湾婦女新知基金 1991)
- 注2 趙麗明・宮哲兵「女書一個驚人的發現」(華中師範大学出版社 1990)
- 注3 Chiang, William Wei, “We two know the script:we have become good friends” :Linguistic and social aspects of the Women’s Script Literacy in southern Hunan, China
- 注4 楊仁里 陳其光 周碩沂『永明女書』(岳麓書社 1995)
- 注5 杉本つとむ『異体字とは何か』(桜楓社 1978、p.9)
- 注6 何静華は、14歳半のとき小学校に入り、第4冊目(2年生後半)から習い始めて、18歳まで勉強したという。

本研究は、平成10年度科学研究費補助金「国際学術研究」によるものである。